

西洋中世学会第 18 回大会（2026 年 6 月 7 日・岡山大学）

司教座都市と大聖堂

—ナラティブ・アイデンティティ・ネットワーク—

The Episcopal City and the Cathedral: Narrative, Identity, and Network

「大聖堂」は「西洋中世」の代表的イメージのひとつである。とりわけ、12 世紀北部フランスで生まれ、西ヨーロッパ各地に広まったゴシック様式の大聖堂は、多様な中世の物質文化・視覚文化のうちでもとりわけ鮮烈な印象を与えるため、キリスト教精神の発露の典型例、西洋中世文化のひとつの到達点であるとも考えられてきた。こうした大聖堂の多くは、司教座が置かれた聖堂であった。司教座は普通、政治的・経済的に重要な都市に置かれ、司教区を管轄した。ローマ教皇(庁)、大司教(座)、司教(座)という役職や組織は、世俗の領主たちの聖界バージョンとして西方キリスト教世界の権力構造をツリー化し、その領域を整然と分割して統制することを目論見たもの、という見方もできよう。

しかし実際には、古代末期から近世までの長きを通じて、そして西ヨーロッパの各地において、大聖堂の建築や装飾の形式、司教の役割と権力の有り様、司教座や司教区の定義・地理的範囲・境界はじつに多様であった。大聖堂の建設を支え、司教の名声を裏付けたのは、信仰心や宗教的情熱だけではなかった。大司教区や司教区というリアルな地理的領域が聖職者のリアルな存在によって区分統治されることもあったが、司教座というものがもっと曖昧で象徴的な意味で用いられることもしばしばであった。古代ローマ都市の周縁部に発生した伝説的な司教や殉教者への崇敬が、やがて有機的に発達して中世の大聖堂を形成することもあれば、王都や発展著しい商業都市のような世俗の政治・経済的重要性が作用して、司教座都市が生まれることもあった。モスクを転用した大聖堂もあれば、領域支配のためにニュータウンとして作られた小さな司教座都市もあった。司教区を治める司教たちは王や貴族たちと支配階層を形成し、時には持ちつ持たれつを築き、時には激しく対立した。大聖堂はまた、司教座の権勢だけでなく、都市の経済的繁栄や市民のプライドを象徴することもあった。

本シンポジウムでは、宗教的な思索と世俗的な思惑が交錯し、庶民と支配階層がニアミスし、精神的理想と物理的現実がぶつかり合う場であった、西洋中世の司教座都市と大聖堂というじつに大きな問題系から、次のような問題を扱う。成川報告は、大聖堂や都市といった視覚的・物理的なランドマークが不在な辺境において、司教や司教座、そのネットワークの記憶がどのように形成されていったかを扱う。山本報告は、大聖堂の内陣仕切りに着目し、その建築的実態のみならず、その象徴性とパフォーマンス性を検証する。桑原報告は、都市空間と宗教空間との境界に強いメッセージ性を付与していた大聖堂扉口に刻まれた、ひとつの図像プログラムの伝播と受容の回路を明らかにする。新居報告は、大都市の大聖堂の回廊という場所に組み入れられたテキストと図像の持つ拮抗を読み解く。嶋崎報告は、破壊された中世大聖堂の近世における再建事例から、建築的伝統と都市アイデンティティの連続と断絶の問題に切り込む。これらは、限定された切り口で、限定された事例を扱うものではある。しかしながら、大聖堂や司教座の機能・風景・マテリアリティ・イメージをめぐるそれぞれのマイクロヒストリーを通じて、それら自体に付与された、あるいはその周囲に形成されたナラティブ、それらが醸成したアイデンティティ、人・物語・図像・儀礼が構築したネットワークの様相を浮かび上がらせることを目指したい。

プログラム

- 12:45-12:55 趣旨説明(伊藤 喜彦 東京都立大学)
12:55-13:30 成川 岳大(立教大学(兼任)ほか)
「中世北欧における司教事績録の移転と大聖堂の記憶」
13:30-14:05 山本 成生(上智大学)
「シャルトル大聖堂の内陣仕切りをめぐる信仰空間」

——5分休憩——

- 14:10-14:45 桑原 夏子(京都産業大学)
「サンリス大聖堂扉口装飾を起点とする画像伝播について」
14:45-15:20 新居 達也(お茶の水女子大学)
「大聖堂の間テキスト性—セント・ポール大聖堂回廊の『死の舞踏』をめぐる」
15:20-15:55 嶋崎 礼(九州大学)
「近世におけるゴシック様式の選択—オルレアン大聖堂を例に」

——10分休憩——

- 16:05-16:15 コメント(木俣 元一 名古屋大学名誉教授)
16:15-16:45 全体討論

報告要旨

1. 成川 岳大(立教大学(兼任)ほか)

中世北欧における司教事績録の移転と大聖堂の記憶

ヨーロッパ北西端の北欧(デンマーク、ノルウェー、スウェーデン)と北大西洋島嶼へのキリスト教の伝播と教会組織の整備は、9世紀以降数世紀をかけた進展した。旧ローマ帝国の版図外に位置し、ヴァイキングなどの形で外部との接触機会が増大する中で、これらの地方は司教に代表される教会のネットワークを受容する一方、キリスト教側もまた現地の環境に適合させつつ組織を構築していくことになる。

本報告では、キリスト教受容後、歴代司教の伝記という形式で司教座の歴史を記す「司教事績録」ジャンルの記述の北欧への受容の過程と、その中で司教と司教座、大聖堂を現地の人々がどのように記憶したかを、キリスト教の伝播元である北ドイツの「司教事績録」、ブレーメンのアダム『ハンブルク司教事績録』の構成や内容と北大西洋島嶼のアイスランドに残存する『アイスランド人の書』や「司教サガ」の一つである『フングルバカ』、さらにスカンディナヴィア半島部(主としてスウェーデン南西部)の史料と比較検討することで探っていきたい。

キリスト教共同体が新たに成長していく中で、都市が存在しない、あるいは新たに発展していく環境

で、司教のネットワークはどのような形で根を張り、そして大聖堂建築を史料作者はどのように書き記したのだろうか。そしてまた、司教座と大聖堂が確立した現地後代の史料の記述は、キリスト教が伝来した同時代史料から推測できる状況とどの程度異なっていたのだろうか。

2. 山本 成生(上智大学)

シャルトル大聖堂の内陣仕切りをめぐる信仰空間

「内陣仕切り」(ジュベ、ルード・スクリーンなどとも呼ばれる)は、西方教会の聖堂建築において、主として内陣と身廊の間に設置される構築物である。中世から近世初頭にかけて、こうした構築物は多くの教会堂に見られたが、18世紀以降、さまざまな要因により撤去され、今日では残存する事例は数えるほどにすぎない。内陣仕切りは、西洋建築史・美術史を中心とする従来の学術研究において不当に過小評価されてきたが、ジャックリーン・ヤングに代表される近年の研究では、建築・美術的意義のみならず、教会堂内部における(広義の)信仰生活において重要な機能を有していたことが指摘されている。また、音楽史を専門とする報告者は、ギヨーム・ド・マショーの《ノートル＝ダム・ミサ曲》がランス大聖堂の内陣仕切りで行われていた私的聖務のために作曲されたとするアンヌ・ウォルター・ロバートソンの仮説に大いに触発されている。

本報告では、このような研究状況を踏まえ、フランスのシャルトル大聖堂の内陣仕切りと、そこでなされていたさまざまな表象およびパフォーマンスのあり方を検討する。同大聖堂は、9世紀後半にカロリング朝から「マリアの聖衣(ヴェール)」という聖遺物の寄進を受けて以降、シャルトル司教フルベールのもとで聖母崇敬のための典礼改革が行われた。その結果、同大聖堂は聖母崇敬の中心地となった。また、歴史的・地理的経緯により、シャルトル大聖堂はカペー朝フランス王権の政治的・精神的支柱でもあった。これらの諸要素が、内陣仕切りおよびそれを中心とする信仰生活にいかなる影響を与えたのかは、本報告の重要な論点である。

本報告ではまず、他の多くの教会と同様に18世紀に撤去されたシャルトル大聖堂の構造や歴史的推移、装飾を確認する。そのうえで、内陣仕切りで行われていた各種の聖務やミサの寄進などから、そこで営まれていた信仰生活のあり方を探り、他の教会の内陣仕切りにも見られる一般的傾向と、シャルトル大聖堂に固有の要素とを明らかにしたい。

3. 桑原 夏子(京都産業大学)

サンリス大聖堂扉口装飾を起点とする図像伝播について

フランス北部サンリス大聖堂の扉口装飾(1170年頃)には、ラントーに《聖母の埋葬》と《聖母のよみがえり》が対をなす形で表され、ティンパヌムに《聖母戴冠(聖母の栄光)》が示されている。聖母の地上での最後の日々を下部に、聖母の栄光化を上部を表す図像プログラムは瞬く間に北フランスの大聖堂装飾に共有されたが、こうした事例は珍しい。この図像とプログラムが誰によって考案され、なぜ複数の都市の大聖堂や教会堂の扉口装飾に繰り返されたのかはわかっていない。

本発表はサンリス大聖堂の建設の背景と、他都市間の司教ネットワークを分析することで、この図像

が広く大聖堂扉口装飾に受容された理由を探る。はじめに、サンリス大聖堂再建事業が国王ルイ7世（在位 1137—1180 年）の意向のもと、民衆から寄付を募りつつ司教ティボーの指揮によって開始された経緯を整理する。次にこの図像とプログラムがどのような思想のもとに生み出されたのかについて、ルイ7世とティボーの置かれた環境から分析する。最後に、大聖堂献堂式に他都市の司教が参列した事実をもとに、フランスの王立司教座都市を中心に本図像とプログラムが伝播していった可能性を示す。また扉口は誰もが目にするのできる箇所であったことを踏まえ、本図像が受容された当時の都市の文化的・社会的背景についても言及する。

4. 新居 達也(お茶の水女子大学)

大聖堂の間テキスト性

—セント・ポール大聖堂回廊の『死の舞踏』をめぐる

1430 年頃、ロンドン市の書記官ジョン・カーペンターの依頼によってセント・ポール大聖堂回廊に『死の舞踏』の中英語テキストと図像を描いたパネルが設置された。中英語版『死の舞踏』は元来パリのイノサン教会納骨堂の『死の舞踏』(1424～25 年)をもとにイングランドのベネディクト会修道士・詩人ジョン・リドゲイトが 1426 年頃に翻訳したものであったが、セント・ポール大聖堂に設られたテキストはカーペンターら市民エリート読者層を意識した改変が施されたものであった。セント・ポール大聖堂の『死の舞踏』は回廊とともに 1549 年に取り壊されたため現存しないが、テキストは 2 つのヴァージョンによって合計 15 点の写本、2 点の初期刊本で現存しており、さらに好古家ジョン・ストウの『ロンドン探訪』(1598、1603 年)の記述や同じくリドゲイトの『死の舞踏』を描いたストラトフォード・アポン・エイヴォンのギルド・チャペル身廊壁画(15 世紀末～16 世紀初め頃)を通して、断片的ながらセント・ポール大聖堂回廊における『死の舞踏』の状況を知ることができる。本発表では、これらの資料に加えて、同時代のセント・ポール大聖堂に掲示されていたタビュラや墓碑銘などの視覚テキスト、中世後期ロンドンにおける書物生産の中心地であったセント・ポール大聖堂境内やその周辺地域で制作・受容された写本を分析することで、『死の舞踏』をめぐる大聖堂と司教座都市の間テキスト的なネットワークの再構築を試みる。

5. 嶋崎 礼(九州大学)

近世におけるゴシック様式の選択

—オルレアン大聖堂を例に

フランスでは宗教戦争期に多数の聖堂が破壊され、その後再建されたが、その多くは当時宮廷で流行していた古典主義様式ではなく、中世様式を部分的あるいは全面的に採用しながら再建された。その背景には伝統の継承、象徴性の重視、経済的な理由があったとされる。

オルレアン大聖堂は 1568 年のユグノーの襲撃により廃墟となった後、フランス国王アンリ 4 世やルイ 14 世の積極的介入を受けながら、17 世紀から 19 世紀にかけて再建・拡張された。内部空間では 14 世紀の様式が再現され、両袖廊ファサードも基本的な構成はゴシック様式にのっとって建設されたため、表面上は破壊前のゴシック大聖堂を再現したように見える。しかし細部を観察すると、フランス中世のゴシックを巧みに模しつつも、やや異なる特徴を示している点がいくつか認められる。本発表では再建の

過程を整理したうえで、様式と技術の両側面から、中世の伝統がどのように継承されたのか、あるいは継承されなかったのかを検討する。とりわけ、ゴシック建築特有の建築要素であるトリフォリウム(内部立面の中間を走るアーケード)に着目することによって、発表者がこれまで調査してきた12～15世紀のゴシック聖堂のトリフォリウムからの乖離の程度を測る。

中世と近世の建築様式の間には断絶あるいは意識的な離反があるというのが通説であるが、現実には両者が柔軟に連続し、臨機応変な様式選択が行われていた。それは古い聖堂への愛着をもつ信徒や都市民のアイデンティティにもかかわる問題であったと考えられる。

以上